

日本のマネージャーと経営学

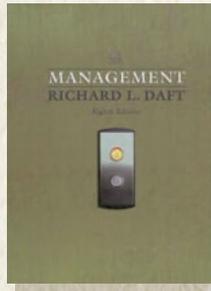
筆者は勤める会社が破綻した結果「経営学」を勉強することになった。「わが社はなぜ経営に失敗したのか」がその問題意識だった。そこで最初に気がついたのは、勤務先ではトップからミドルまで経営の基本的論理の体系的理解を欠いていたように思えたことだ。英語を身につけるのにまず文法か

ら入るように、企業経営を行うには少なくとも経営学の原理ぐらいいは頭に入れておく必要があった。日本企業の経営幹部の大半は法、経済、工学部の出身で、大学で「経営学」を勉強することはまずない。会社に入り上司の見よう見まねで経営の要諦を身につけ、いわゆるノウハウものや成功した経営者の名言集のようなものでその理屈づけをしてきた。文法を無視して会話を習うようなもので

ある。企業内経営研修も管理職の心得のようなものが中心で、「経営学」を体系的に学ぶというようなことはなかった。

「経営学」を学べば経営がうまくいくといっているのではない。良い経営には論理的な思考が必要で、その思考の枠組みの体系として「経営学」が役に立つということだ。

「経営学」とは、如何に経営環境を理解し、分析し、戦略を立て、組織を



① **Management (Eighth Edition)**
Richard L. Daft
Thomson/
South-Western
2008

作り、人を動かし、経営成果を管理するかの枠組みである。組織を運営するための体系立った基本原理の理解があつてはじめて、競争に勝ち、人を生かし、問題を解決して、高い経営成果を達成できる。

筆者は今ではいくつかの企業で、「経営学」の理論と具体的なケースを組み合わせたミドル向けの研修をやらせてもらっている。今回ご紹介するのは、このようなときに筆者が頼りにする、日

米で版を重ねた代表的な「経営学」の基本テキストである。テキストと侮ることなかれ。これを手元において経営の辞書のように使えば、その役に立つこと本屋にあふれる実用経営書の数倍である。

①は、バンダービルト大のダフト教授が初版を出して二〇数年で八版を数え、二〇〇八年版が出たばかりの改良に改良を重ねたベストセラーである。「経営学説史」に始まり、「経営環境の



② **経営学への招待 (第3版)**

坂下昭宣
白桃書房
2007年3月

理解」「経営計画」「経営組織」「リーダーシップ」「経営管理」の六章にわたる八五〇ページの電話帳のような大著だ。アメリカのテキストはわかりきったようなことまで丁寧に書くので分厚くなってしまうが、最新の学説まで理論を網羅し、それが適用される現実の経営事例とよく結びつけられている。類書と比べてその平易で網羅的な本書の中身の優位性は明らかだ。人事管理の章など一部アメリカの特

殊的な章があることはやむをえない。

②は、経営組織論の泰斗である神戸大学坂下教授のライフワークだ。最新の理論水準とわかりやすい入門書の記述が両立し、一九九二年の初版からこの三月に出たばかりの三版まで進化を重ねた日本のこの分野でのベストの書である。「戦略を立てる」「組織を作る」「人を動かす」という経営の三要素の枠組みに分けられ、全体で二九一ページとコンパクトにまとめられて

いる。著者の専門から組織やリーダーシップの部分は入門書を超えて大変に深い内容となっており、じっくり読み込んで組織や人事の原理を考えるのに適している。ダフトと比べて「経営管理」に触れることがなく物足りない面はあるが、これは日本の経営学の入門書に共通するので仕方ない。情報技術を用いた経営管理の最先端理論の動向は①で学べばよいだろう。